

列人列景

小田実



人列景

小田実

講談社



列入列景

一九七七年八月二十四日第一刷発行

著者——小田実

© Makoto Oda 1977, Printed in Japan



発行者——野間省一

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二二三 郵便番号二三 電話東京三—四三—二二 振替東京六—五三〇

印刷所——豊国印刷株式会社 製本所——藤沢製本株式会社

定価——一二〇〇円

落丁本・乱丁本はおとりかえします (文1)

目次

花電車 5

墓と火 61

茫 107

ラブ・ストオリイ 183

ケシキ調べ 237

疑問符 301

あとがき 361

裝
幀
玄
順
惠

列人列景

花電車

一

花電車というものがある。女が舞台の上において、ピンボンの玉を出したり入れたりする、あれである。

本来の花電車のことではない。もともと、何が本来なのか。もうかれこれ一年近くも以前のことになるが、そちらのほうが本来の花電車であると思ひ込んでいた女に会った。すくなくともつい先日までそう思ひこんでいたと当の女性が言った。若い子で、二十四歳と私がわざと年上の数字を出して彼女の年齢のことを言うと、やにわに笑い出した。その笑い声にまったく屈託がなかったから、二十そこそこの年だったにちがいない。その年で、本来の意味でないところの、彼女自身のことばを借りて言えば「へんなほうの意味の」花電車のことを知っていたとしてもおどろきに値しない。彼女たち、このごろ、今どきの若い女性が愛読する、このごろ、今どきの女性週刊誌のたぐいには、構造、姿勢、技術（のなかには、ファラチオの技術まで図解入りで入っている）はおろか花電車、シロクロの解説に至るまで情報は豊富なのだ。××銀行という名前を言えば誰でも知っているような大銀行の支店の「बीजीー」である（ここで、「बीजीー」という日本製英語を使う誘惑に抗し難い。誰がつくってはやらせたのか、便利なことばだ。彼女の場合、銀行に勤めていると言

っても、「行員」というものではないだろう。彼女の主観においても、彼女を見る他人の意識においても、決してそうではないにちがいない。「会社員」とか「勤め人」とかいうことばも、彼女、そして、世に幾十万、幾百万という彼女たちにはそぐわない。やはり、「ピージー」である。すくなくとも、そうとしか言いやうのないありやうを示すものとして、彼女は私のまえに立ちあらわれて来た。あるいは、強いてほかの言い方を探せば、「オーエル」だろう。これもまた不可思議にして的確な日本製英語だ。彼女が「へんなほうの意味の」花電車のことをふくめてそうした情報に精通していたとしてもふしぎはない。彼女が花電車ウンヌンのことを言ってから私は彼女のその種の知識の量と正確度をたしかめてみたい誘惑に駆られたが、そうは言っても、べつに近くのモーターにでも出かけて実地にたしかめたかったのではない。なにしろ彼女とは初対面だし、それほど魅力にもみちていなかった。それで、事實はあくまで口頭でそれをたしかめたかということになるが、私がしなかったのは、彼女があまりに無邪気にそれだけの知識を披露したからだ。そして、そのあと、この夏、山陰地方に銀行のお友達二人と旅に出かけたときは楽しかった。あそこには自分たちの見失なってしまった古き良き日本、なつかしい故郷のような日本が残っているみたいと、本来の意味の花電車にも「へんなほうの意味」のそれにもたいしてかわりあいのない、このごろはやりの国鉄の思わせぶりの観光ボスターにあるようなことを、たしかに楽しかったことだけは着実に判る口調でそのまますづつづけて言った。

彼女とは知り合いであつたわけではない。Y市に所用で出かけて、その所用をすませたあとと列車を待つあいだ駅前であらうしていたら、横手の本屋から出て来たのが彼女だった。今その店で買ったばかりらしい本の紙包みを小わきにかかえて、若い女性にしてはいくぶん疲れ気味の地面に足をこすりつけるような歩き方で出て来た彼女と出会いがしらに眼が合つて、とたんに、アッと声

を出した。知り合いかと思つたが、それでもないらしい。私があるまま横を通り抜けようとしたら——さんですか、とようやく言つた。それまで黙つてマジマジと私を見ていたのである。私がうなずくと、私の本を読んだことがあると言ひ、げんに一冊買ったばかりであるとわきの紙包みをかかえなおすようにして私に見せた。読者の出現であるが、こういうときは困るものである。ことに、このごろ、今どきの若者は男女の別を問わず親父がた、母親がた、先生がたによつてたかつて甘やかされていて、話しかけられるのは常に自分、話のツギ穂を見つける義務のあるのはきまつて相手というぐあいに世の中のありようをみきわめているフシがあるので、なおのこと困る。とどのつまり私があれこれ話題を探して話して、お茶でものみましようかということになった。口もとに魅力があつた。面長で、全体が端正なおもむきだが、口が円く小さく、そこから白い歯がのぞいて、感じがよかつた。面長で端正なので年よりふけて見えたが、笑うと、その口のおかげで、たちまち子供っぽくなつた。全体の面長が円くなつて、どうかすると、二十そこらの女の子というよりイタズラ盛りの坊やに見えた。それが見たくて、喫茶店での小一時間の話の後半は、私は故意に彼女が笑い出しそうな話題を選んでいたきらいがないとは言えない。彼女と別れたあとで、はつきりそう思つた。

さつきも述べたが、彼女はその市の××銀行の支店の「बीジー」であつた。支店は本屋の近く、同じ駅前にある。そういう「一流」のところに勤めているという誇りを、喫茶店に入るまでの街頭でのわずかな時間のあいだの立話のなかでも彼女は無邪氣に見せた。ただ、やはり、このごろ、今どきの娘である、同時にそういうところにお勤めをしていることに自分はほかの人とはちがつて必らずしも満足していない、たとえば、東京に行ったときには偶然のことながら通りかかったベトナム反戦のデモ行進に参加したことがあると、これも街頭での立話のなかで気負つたように言

った。その種の気負いと言いい無邪気な誇りと言いい、それらは青春の附屬物であり基本だが、私が彼女を喫茶店に誘ったのは、べつに彼女のベトナム反戦の志こころざしに打たれたせいではない。

何がキッカで話が花電車のことになったかはきわめて簡単なことで、私が彼女を連れてあてずっぽうに入った喫茶店の名前が「花電車」だったのだ。東京の街の昨今の変わりようをY―市のそれと比較することから始めてデモ行進のことから女の子の服の流行のことから今度芥川賞をもらった女流作家の小説のことからY―市の名物の押しズシのことから話はいかようにも進み、弾んだが、いや、もっと正確に言うのと、私が進ませ、弾ませたが、話の半ばでタバコに火をつけ、その拍子にマッチの箱を見ると、その店の名前が「花電車」だった。私はその通り声をたてて読んでみせると、彼女は何かおかしいのか急に笑い出し、イタズラ坊やの表情で、そのまますぐ、わたし、花電車という、へんなほうの意味の花電車ばかりだと思っていたんですとよどみなく言った。いや、さらに彼女は同じよどみのない口調でつづける。お祭りなんかのとき、市電に飾りつけしたりするのも花電車と言うんですってね。わたし、知らなかった。

前者の意味の花電車のことを知ったのも女性週刊誌なら、後者の飾りつけしたりするのも花電車と言うのも、そこから知った知識だった。彼女は正直にそんなふうに私に告げ、その口調にもよどみはなかった。そして、そのあと、さっきも書いたが、山陰地方の旅の思出話を切れ目なしにやり始めた。

いささかおどろいたが、私はものを書くかたわら大学の教養課程で長年のあいだ若い男女を教えて来ていたから、そういうことにかけてまったくの初心者ではない。彼らにはいろんなことであるところでおどろかされていて、それだけのことで彼女のことをおぼえていたりはない。第一、私は今はもう彼女の告げてくれた名前もきれいいサッパリと忘れ去ってしまったているのだが、別

れぎわにやにわに私にぶつつけて来た二つのことばのゆえに、彼女のイタズラ坊やじみた表情がどうしても私の記憶から立ち去らない。列車の発車時刻が来て私が別れを告げて立ち上ると、彼女は私をプラットフォームで見送ると言いはり、それは改札口でしてもらうことにしてお引き取りを願ったのだが、改札口で彼女はまるで私の妻か恋人のようにからだをすり寄せて来て、私の耳もとに口をつけた。東京では浅草なんかで花電車やっているんですって。先生なんか、四十すぎた中年男だからときどき行くんですよ。今度行くとき、連れてって。電話して下さい。わたし、知りたいんです。

いや、さらに次のようなこともつづけて言った。告白するのはいやだが、そちらのほうが私にこたえたことも事実で、それではつきりと彼女の表情を記憶することになったのかも知れない。楽しかったですと精いっぱい芝居をしている（したがって、それはまったく下手な芝居だった）口調で言い、それからひと呼吸おいて、でも、先生の話、もっと面白いかと思つて期待していたんです。案外……

つまらなかったと言つたか、面白くなかつたと言つたか、そのところは正確におぼえていない。やにわに平手打ちをくわせられたというほどの衝撃力はなかつたにせよ、読者のままで先生面をしてやに下っている心の隙間に指を突つ込まれたぐらいの感じはあつた。それで思わず私は彼女の顔をふり返つて見たのだが、彼女はまさしくイタズラ坊やのように人なつっこく笑つていた。

二

東京へ帰ってから、私はべつに浅草なんかの花電車に行かなかつた。ただ、浅草そのものを散歩していたとき、ボン引きらしい男に花電車見物を誘われたことがあつた。いや、もうひとつ言う

と、そのとき、いつになく見物したい気持ちになったことも事実だ。私はもうそのときには彼女の面前も忘れていたが、彼女のことばはまだからだのうちにねばっこく残っていて、ボン引きの勧誘の口上に耳を貸すふりをしながら、眼はしきりにすぐ近くのタバコ屋の店頭の赤い公衆電話を見ていた。もちろん、名前を忘れているぐらいだから、電話のかけようもない。それは事実だが、そのときそんなふうにして公衆電話を見ていたのもその事実以上の事実だろう。だいたい、私はボン引きに誘われたことがない男だった。私に言わせればそれは私にスキがないからで、友人に言わせると、同じことが人相がわるくて刑事に見えるからだということになるが、とにかくそのときのようにはボン引きが私の顔を見るなりたちまち声をかけたというようなのははじめてだった。よほど、物欲しげ、いや、セックス欲しげに見えたのだろう。それは、彼女の、先生なんか、四十すぎた中年男だから、ときどき行くんでしょということばにじかにかかわっていることがらだった。あるいは、推理だった。ボン引きも彼女も、案外、私の心、いや、からだのなかにあるものを見ぬいていたのかも知れない。そして、それは、案外、つまらぬものであるのかも知れない。私は花電車の誘いを受けたことにこだわっていた。誘いを受けて行かないことにもこだわっていた。そんなことははじめてだった。これが四十をすぎた中年ということかも知れないとも思った。

三

私の考えでは、花電車ほど即物的な見世物はない。性にかかわる見世物には、ストリップというようなものもあるが、あれは、人間のハダカ全体を見せるのであって、一部の局部だけを見せるものではない。もちろん、なかには「医学観察」のようなストリップもあって私も見たことがあるが、「観察」の対象はたしかに局部ではあっても、それはあくまで人体の一部としての局部だ。たと

え、そこに穴ボコがあっても、穴ボコは太モモ、腰、腹、乳房につながり、さらに座席のあるいはカブリツキの観察者を舞台の上から見下す局部の所持者の笑顔が、たとえそれがどのようなようにつくり笑いの笑顔であろうと（ただし、私は彼女たちの名譽のためにぜひとも言っておきたいのだが、女性はその場合決してつくり笑いなどしないものなのである。私の観察体験、人生哲学の双方に基いて主張したいが、女性には、見セテクレヨナ、ドウセ減ルモノジャアルマイシと切望し懇願する男衆生をまえにしては、慈悲をたれたもう慈母観音の笑いをエンゼンと笑うのである。正直に言うが、そのときほどのエンゼンとした、慈悲もあれば花もある笑いを、女性において私は見たことがない）、花電車の場合のように穴ボコだけが独立しマシンのように機能することはない。

シロクロというような見世物についても、ことは同じである。花電車にくらべると、あれもまた悲しいほどに人間の見世物、したがってどうしようもなく人間臭い見世物で、穴ボコだけがマシンの動きを示したりはしない（私がここで「マシン」という片カナ英語を使って「機械」と言わないのは、後者を使うと、何かおどろおどろしく巨大なものの感じがして来るからだ。重工業の感じである。「マシン」と言えば、たとえば、「ピッチング・マシン」である。手工業、手づくりの感じで、もっと人間に密着している。人の世のいとなみによりそっている）。あれには女性以外に男性の演技者が必要で、男女が二人いれば、どうあっても射して来るのはくらしの影で、結合するにせよ、別れるにせよ、まるで人の世のいとなみの模型みたいなものだ。男女の演技者には夫婦者が多いということだが、これも人生の模型であってみれば当然のことであろう。こうした見世物にまで人間臭さを求める人間主義者ならそれもまたよきかなだが、私は同じ人間臭さなら、模型のそれより実際のありようのなかでのものを選択するたちだ。シロクロの一方の主役の男性はたいいてい衆人環視のなか一日に何度となくことを行なうことができるという英雄で、それだけでたしかに実人生

ばなれがしているが、それでも、雑誌に出ていた英雄の告白談のなかで、英雄においてすら不能の瞬間が訪れることがあったというのを読んだことがある。まさに英雄もまた人間で、そういう話ほどその事実を感じさせることはない。そこまで話が行かずとも、シロクロの場合、ことには終りがあって、女性にはなくても一方の主役の男性には確実にあって、歓楽ツキテ哀歎生ズ。終りは、人生にあっては、たいてい、悲哀にみちている。

そこへ行くと、花電車には終りが無い。バナナの輪切りなどはいざ知らず、すくなくとも、ピンポン玉の出し入れを見ているかぎり、花電車の主役の穴ボコはその動作をマシンの——つまり、規則的、平均的、無表情的、無感動的につづけて、その動きはあたかも無限運動のように見える。燃料が切れればマシンはバタリと動きを停止するが、花電車のマシンにもそういう即物的なところがあつて、燃料が切れればすぐさまバタリととまる。そして、切れないかぎり、運動はいつまでもつづく。私は、今、「花電車の主役」というふうに穴ボコのことを表現したが、実際、ここでの主役は穴ボコそのものであつて穴ボコの持主では決してないのだ。持主もまた太もも、腰、腹、乳房、あるいは、さらに上方にそれらにつながる頭、顔をもつが、人びとの眼はまず、そして、何よりも、穴ボコ自体にあつて（ここで私が思い出すのは、「物自体」という哲学用語だ）、あとはまさしく附属部、いや、あまり物にすぎない。そして、ここがかんじんなところだが、あまり物のほうも人格をもたない物であるなら、穴ボコのほうもまさしく物——「物自体」だ。ここで、「物」を、子供のとき大阪は鶴橋の闇市でならいおぼえた日本語の発音を使って「ブツ」というぐあいに読んでおきたい。そのほうがいかにも即物的で、「物自体」に密着している感じだからだ。その鶴橋の闇市には朝鮮人があまたいて、と言うよりはそれこそは朝鮮人が開き、主導権をにぎっていた闇市だが、彼ら朝鮮人もまた、その即物的な日本語の発音方法を好んで用いていて、何かと言うと「ブ